琉球大学学術リポジトリ

トマス＝ブラッシー二世とリブ＝ラブ派経営者の論理 （二）

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2011-07-21
	キーワード (Ja): トマス＝ブラッシー二世,
	イギリス労働組合会議, ジョージ＝ハウエル, 不況,
	リブ＝ラブ派労働者
	キーワード (En):
	作成者: 佐喜真, 望, Sakima, Nozomi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21227

地理歴史人類学論集　No.2（2011）pp. 1-19
Journal of Geography, History, and Anthropology

トマス=ブラッシー二世とリブ=ラブ派経営者の論理（二）

佐喜真　　望

Thomas Brassey Jr. and his Argument for Liberal-Labourism From the viewpoint of employer（2）

Nozomi SAKIMA

要　旨

本論文では、いち早く労働組合運動とその指導者に好意的な発言を行い、労働組合運動の指導者とも親密な関係にあったリブ＝ラブ派資本家の代弁者トマス＝ブラッシー二世の1876年から1878年までの、論文、学会発表及び講演記録を資料として、彼の労働諸問題に関する見解の変化の過程を解明した。その結果、ブラッシー二世は、ストライキが賃金に及ぼす影響を条件付きで認め、労使紛争を調停する機構の設置により前向きになった。また、この時期は、いわゆる「世界大不況」がイギリスの産業に暗い影を落とし始めた時期である。不況は労働組合のせいだという見解もあった。しかし、ブラッシー二世は、不況の原因は現場を知らない投資家のせいであるとして、労働組合を擁護した。この結果、労働組合の指導者の彼に対する信頼はさらに高まり、ブラッシー二世が1877年のイギリス労働組合会議で講演を行ったり、逆に、1878年にブラッシーが基調報告を行ったロンドンの建築労働者の賃金問題に関するシンポジウムで、リブ＝ラブ派のイデオローグであるジョージ＝ハウエルがコメンテーターを務めたりしている。こうして、ブラッシー二世とリブ＝ラブ派労働者の関係は、これまで以上に親密なものとなるのである。

キーワード：トマス＝ブラッシー二世、イギリス労働組合会議、ジョージ＝ハウエル、不況、
リブ＝ラブ派労働者

はじめに

前稿「トマス=ブラッシー二世とリブ＝ラブの論理」において、筆者は、自他共にリブ=ラブ派経営者の代弁者として認められていたトマス=ブラッシー二世の1871年から1873年までの講演、手紙などを検討し、1869年の下院における労働組合に好意的な発言及び1872年の著書『労働と賃金』の発行以降も、彼が、労働組合の共済機能とイギリスの熟練労働者の能力を積極的に評価していたこと、労使交渉及び労働者の下院への進出により好意的になったこと、この結果、彼と労働運動の指導者たちの関係はさらに深まったことを明らかにした[(1)]。その後、トマス＝ブラッシー二世とリブ＝ラブ派の労働組合運動の指導者たちの関係はどのようなものになるのであろうか。イギリスの労働者の質は高いので、相対的に高い賃金を支払っても問題はないとする、彼の従来の主張は、いわゆる「世界大不況」の到来によって修正されたのであろうか。

本稿で取り上げる時期は、1877年９月のイギリス労働組合会議の第10回大会においてブラッシー二世が講演を行ったり、逆に、1878年に、彼が王立建築家協会(Royal Institution of British Architects)に向けて行った報告に対して、リブ＝ラブ派労働者のイデオローグであるハウエル（G.Howell）がコメンテーターを務めたことが、端的に示しているように、ブラッシー二世とリブ＝ラブ派の労働組合運動の指導者との関係がさらに深まった時期に相当する。また、ハウエルは、いわゆる「新組合主義」の運動が本格的に始まった1890年代になっても、ブラッシー二世に好意的であった[1]。リブ＝ラブ主義と同様、リブ＝ラブ派の労働組合の指導者とリブ＝ラブ派の資本家との友好関係も長きにわたって続いたのである。本稿では、このような展望に立って、トマス＝ブラッシー二世とリブ＝ラブ派の労働運動の指導者との関係が、演説者と単なる聴衆及び著者と読者の関係から、よりフォーマルな関係へと変化し，両者の長期的な友好関係の基礎となった1876年から1878年までの彼の賃金、労働組合、不況に関する主張について検討する。

（1）ブラッシー二世の『インターナショナルレビュー』論文

1876年の９月に、ブラッシー二世は『インターナショナルレビュー』に「イギリスにおける現在の労働の価格に影響する諸力について」というタイトルの論文を発表した[2]。その最初の部分で、彼は、イギリスの産業が、現在、前例のない不況にあると認めている。また、これに伴って、労働者の賃金も下降気味であるという。さらに、このことは、アダム＝スミスが『国富論』の中で述べている、賃金は労働者に対する需要によって決定されるという原理の正しさを確認するものだという。これをみる限り、ブラッシー二世は、労働組合の闘争が賃金水準の決定に及ぼす影響力を、これまでと同様に否定し続けているかのようである。ところが、彼は、他方で、この原理が当てはまらない例外的なケースが唯一存在したと主張する。

その例外こそ、彼の父が、世界中のあらゆる地域で事業を展開した鉄道建設業だという。そこでは、総費用に占める労働コストの割合はどの国でもほぼ同一であったという。もちろん、各国の賃金水準には大きな開きがあった。しかし、賃金の高い国の労働者は低い国の労働者に比べて質が高いので、それを加味すると、総コストは変わらないことを実証したというのである。ブラッシー二世が，1869年の下院演説で述べているように、この時期のイギリスの労働者の賃金は他のヨーロッパ諸国に比べて高かった[3]。しかし、他の国よりもイギリスの労働者の質は高かったので、彼の父はイギリスの労働者の相対的高賃金によって不利をこうむることはなかったとも述べていた。

賃金の水準が単なる労働力に対する需給だけでは決まらないとすれば、それ以外の要因を考慮しなければならないことになる。それでは、ブラッシー二世は、労働組合による団体交渉及び時として決行されるストライキは賃金水準の決定に何らかの影響力を行使し得るということを、つ

---

(1) ブラッシー二世の経歴、彼に関する研究動向については、拙稿「リブ・ラブ派経営者トマス・ブラッシー二世追想」若尾祐司、和田光弘編『歴史の場』（ミネルヴァ書房　2010年）118－119頁。その後、ブラッシー二世に関する本格的な研究は出現していない。しかし、彼の著書の復刻が進みつつある。その中でもPart Ⅰ *Foreign Competition* 1904, Part Ⅱ *Wages and Employment,* 1908は、わが国の大学図書館に所蔵されていないがプログレッシヴィズムとブラッシー二世の関わりを探る重要な資料である。

(2) Brassy,On the Influences affecting the price of Labour in England at present.*New Review*の詳細は不明である。本稿で考察したのはBrassey, *Lectures on the Labour question.* pp.173-196に再録されたものである。
拙稿「リブ＝ラブ派経営者　トマス・ブラッシー追想」121－123頁

いに認めるようになったのであろうか。また、彼は、団体交渉を経営者にとって積極的な意味を持つと考えていたのか。さらに、世界大不況に直面して、ブラッシー二世のイギリスの労働者及び労働組合とその指導者に対するこれまでの好意的な見方は修正されたのであろうか。

ブラッシー二世の労働者及び労働組合に対する基本姿勢に変化はなかった。彼は、労働組合の指導者たちとの友好的な関係を今後も維持したいと望んでいた。彼は、イングランドにおいて、労働者と資本家の敵対感情が徐々に減りつつあると主張し、そのことに満足の意を表している。また、彼は、意識の上では資本家であり、労働者と資本家の敵対感情が弱まった理由として、彼の属する階層＝資本家の間に、労働者に対する寛容な共感の念が抱かれるようになり、労働組合の指導者の大多数と彼らの指導を受ける職工たちもそれに報い、資本家たちに共感の念を持つようになったという。また、彼の考える資本家の労働者に対する配慮は、家父長主義的なものだけではなく，労資の法的平等をも含んでいた。それ故、ブラッシー二世は、1875年に成立した労資関係における二つの画期的な法律、即ち主従法を廃止し労資を法的に対等とした「資本家と労働者の法」と平和的なピケッティングを合法化した「陰謀と財産保護の法」を、資本家の労働者の福祉に対する配慮の表れとして積極的に評価したのである。

もちろん、労働者の団体交渉権が確立しても、経済が不振であれば労働者の生活は向上しない。ブラッシー二世もそのことは認識していた。そこで、彼は現前の不況がなぜ起こったかについて、独自の説を展開する。不況が生じたのは、産業資本のせいでも、もちろん、労働者のせいでもなかった。それは投機資金のせいであった。ブラッシー二世は、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、オランダ、ロシア、ベルギーの主要都市の1875年の利子率を比較している。その中で、利子率が一番高いのは、ペテルスブルグの５.25%、一番低いのはロンドンの３％であった。しかも、イギリスは各国の中で最も大きな資本の蓄積を有していた。この結果、イギリスの投資家はより高い収益を求めて外国への投機に走った。その中には不適切なものもあった。この結果、多くの人が損失をこうむり、需要は減退することになった。また、彼らは、名目の利子率よりも高い収益が見込まれると判断した時には製造業にも投資したが、そうした行為は生産の過剰を引き起こし、不況をさらに激化させることになったというのである。こうして、産業資本家も労働者も同じ不況の犠牲者だという結論が導きだされることになる。

その具体例として、ブラッシー二世は、ある製鉄業者の証言を挙げている。それによれば、1871年９月から1872年の７月までの間に銑鉄の価格は２.４倍に、また、原料である石炭の価格は３－４倍となった。この結果、この業種に対する投資は激増し、労働者の賃金も増加した。しかし、好況は長続きせしなかったのである。その後の不況の影響に関して、ブラッシー二世の話は、鉄製品ではなく、石炭と炭鉱労働者の話に移っている。その後、石炭の価格は急速に下落し、1874年の10月には1871年９月の急速な値上がり以前に近い水準にまで低下したのである。これを受けて資本家は賃金の引き下げに踏み切ろうとした。炭鉱労働者の組合は、これに抵抗してストライキを決行したが、結局、屈服した。

ブラッシー二世は、この事例から、ストライキと賃金の問題に関して、彼なりの教訓を引き出そうとしている。その際、彼は、古典経済学の労働者の賃金は労働力の需要によって決定されるという主張の正しさは、このストライキの失敗によっても証明されたと主張している。しかし、仔細に検討してみると、彼が、これまでの主張の大胆な見直しを行っていることが明らかになる。

これまで、彼は、ストライキをしても賃金は上昇しないと主張し続けていた。しかし、この論文の中では、好況期と不況期を分け、好況期においては、ストライキによって賃金を引き上げることは可能だと明言しているのである。彼が、平和的なピケッティングの権利を認めた1875年の「陰謀と財産の保護の法」に好意的であったことについてはすでに触れた。ブラッシー二世は、建前では古典経済学の主張の正しさを強調する。しかし、実際には、彼は以前よりも、さらに、親労働組合的な立場を取るようになっている。また、彼は、鉄工業の収益が悪化した原因は、労働者の賃金が不当に上がり過ぎたためであるとは考えていなかった。ブラッシー二世によれば、賃金が上がったことそれ自体ではなく、賃金が上がったにもかかわらず労働者の仕事の質が低下したことにあった。つまり、賃金が上がっても労働の質が高ければ資本家は利益を挙げられるという彼の持論は、不況が影を落としつつあった時代にも変わることはなかったのである。

ブラッシー二世は、この論文の中で、自分の主張は公平な立場に立つものであると読者に示そうと努めた。そのために彼が用いた方法は意外なものであった。ブラッシー二世が、ロンドン労働組合評議会のリーダーであるハウエル(G.Howell)及びシプトン(G.Shipton)と親しい関係にあったことは、別稿でふれた。これに加えて、彼は、ジョージ＝ポッター（George.Potter）とも交流があった。1876年の５月に、ブラッシー二世はポッターに手紙を送り、炭鉱業、製鉄業に従事する労働者の事情について質問したのである。これを受けて、５月12日、ポッターはブラッシー二世に対して、彼の質問に丁寧に答えた返信を送った。ブラッシー二世は、この論文の中で、その全文を引用している。それによれば、地域差があるので両業種の正確な賃金について語ることは困難であるが、労働組合が、経営者と交渉を行った場合には、実際の賃金額ではなく、賃金をどの程度上げるかが問題とされていたという。つまり、ポッターは、労働組合の存在が賃金の引き下げに対する歯止めとなったと主張しているのである。

しかし、炭鉱業の例にみられるように、労働組合がストライキによって賃金の引き下げに抵抗を試みたが失敗に終わった例も存在した。ブラッシー二世が、この矛盾を解決するために持ち出した論法は全く意外なものであった。彼によれば、炭鉱労働者の組合はそのほとんどが最近5年間に結成された、まだ歴史の浅い、規律において不完全なものだというのである。いいかえれば、炭鉱労働者の組合よりも古い伝統的を持ち規律もより完全に近い組合においては、ストライキも起こらず、賃金も下がらないということになる。ブラッシー二世は、その実例として、まず、「合同機械工組合」を挙げる。さらに、「鋳鉄工組合」「蒸気機関製造工組合」などの各組合が列挙されている。すでに、1872年に出版された著書『労働と賃金』の中で、彼は、労働組合を認めた方が、労働争議は統制のとれた穏健なものになると主張していた[4]。しかし、具体的には、何も述べられていなかった。著書の出版からこの論文を執筆するまでの期間に、ブラッシー二世は、現在の労働運動の指導者たちとの交流を深め、労働組合を認め、労使交渉のルールを定めることは経営者にもプラスになるというこれまでの信念をさらに強めたものと思われる。

事実、彼は、炭鉱労働者よりもさらに歴史の浅い組合である農業労働者の組合の指導者とも交流があった。この論文の中で、ブラッシー二世は、農業労働者の組合の書記長テイラー(Taylor)から1876年５月９日に受け取った手紙及び委員長ジョセフ＝アーチ(Joseph Arch)から同年の

---

[4] 同126頁

５月13日に受け取った手紙の原文を、そのまま引用している。彼によれば、イギリスの農業労働者は、最近の生活に至るまで豊かなイギリスにとって不名誉となるほど悲惨なものであった。教育も受けず、政治の知識もない彼らは、自分たち以外の人々の生活がどのようなものであるかを知らず、自分たちの境遇を改善しようという目的意識を持つことも、そのためのプランを持つこともなかった。しかし、ジョセフ＝アーチの登場により、ついに、これまでの状況から脱する道が開かれたという。アーチは雄弁家であるだけでなく、事実に基づいて議論を行う説得力ある人物であった。

ブラッシー二世は、1872年２月の結成以降、「全国農業労働者者組合総連合」が行った一連の闘争を支持し、全ての公平かつ思慮深い人々によって、借地農たちの行動は非難されたと明言している。さらに、「全国農業労働者組合総連合」の闘争が敗北した場合でも、長期的に見れば、彼らの闘争の後、農業労働者の待遇は改善されたと述べる。テイラーとジョセフ＝アーチの書簡はその論拠として引用されているのである。テイラーによれば、全国平均で、組合の結成前と結成後では賃金額に少なくとも週３シリング（率にすれば20パーセント強）の上昇がみられたという。また、条件が同じなら労働組合が存在した方が組合のない場合よりも明らかに労働者の賃金は高いという。アーチは、ドォセットシャー、ノーフォークシャー、ウォーリックシャー、ウィルトシャー、リンカーンシャーにおける賃金の引き上げの実例を列挙している。また、経営者は、組合が解体した時にのみ、賃下げを行うという。さらに、農業労働者の賃金の引き上げは貧民の数を減らし、救貧税を大幅に減少させる、労働者の知性が大幅に向上すると主張している。

こうして、農業労働者の組合に好意的な態度を示したブラッシー二世は、いまや、以前のように、労働組合の共済機能を評価するのではなく、労働組合の交渉機能が経営者にとって持っている積極的な意義を強調するようになったのである。「労働組合のあらさがしをしても無益である。多数の人々が、一緒に、雇用されるようになったなら、彼らが、お互いの利益を守るために団結するのは当然のことである。そうした団体を承認し、経営者と労働者が交渉し、合意に達するために、そうした団体が与える便益を利用した方がよい」[5]。経営者の代弁者を自認する人物からこのような発言がなされたことは、労働組合運動の指導者たちにとって、まことに力強い援軍であった。1877年のイギリス労働組合会議の年次大会において、ブラッシー二世が講演を行うという画期的な出来事は、彼の発言、そして、彼が、前稿で述べたハウエルとシプトンのみならず、本稿で明らかにしたように、ポッター、アーチとも手紙をやりとりする程の仲であったことを考慮に入れれば、それほど、奇異なことではない。

しかし、これまで労働者の賃金が向上したのは、好況に助けられたという側面があることも否定できない。ブラッシー二世がこの論文を発表した1876年は、農業をはじめとして各方面で不況の影響が感じられるようになった時期である。ブラッシー二世も、そうした事態を無視することはできなかった。この論文の中で、彼が、不況の打開策として、提示しているのは、次の三つである。まず、第一に、各国が保護関税を撤廃して、イギリス製品に門戸を開放することである。「もし、保護関税がなければ、我々の鉄製品はフランス、ロシア、そして、アメリカ合衆国に、大量に輸出されるであろう」[6]。ただし、保護関税の撤廃は、それぞれの国が決定するもので

---

[5] Brassey,*Lectures on the Labour Question*,p.195.
[6] *Ibid.*,p.194.

あり、ブラッシーには如何ともしがたいものであった。そこで、常に、イギリス経済に関して楽観的な見通しを持っていた彼は、日本、中国、アフリカなどに、イギリスの鉄製品に対する新たな重要が発生することに期待をかけたのである。

ブラッシー二世が、提示した第二の解決策は、イギリスの労働者が、生産性を向上させることである。これまで、何度も述べてきたように、イギリスの労働者は他の国に比べて賃金は高いが、生産性も高いので、イギリスの経営者は、相対的高賃金によって不利益を蒙ってはいないというのが彼の持論であった。ブラッシー二世は、そうした持論そのものは修正しなかった。しかし、今後は、イギリスの労働者がさらに生産性をあげる必要性がさらに高まったと考えるに至ったのである。そのための手段として、彼は、再び、出来高払い制を導入する必要性を説いている。

しかし、このような主張は、彼と労働組合運動の指導者たちとの間に重大な意見の対立を引き起こすものであった。もし、出来高払い制が導入されれば、同じ熟練労働者の間で収入の格差が生じ、労働者間の団結が損なわれる可能性があった。また、出来高払いの計算基準が、今後、労働者に不利になるように変えられる危険性があった。

もちろん、労働組合の指導者の方も、出来高払い制の持つ問題点に気づいていた。ブラッシー二世と極めて親しい関係にあり、労働組合は、良い経営者にとってプラスになると主張し続けたハウエルも、この点については、ブラッシー二世の主張を受け入れなかった。彼は、1878年に発行された最初の著書『歴史的経済学的に見た資本と労働の抗争』の中で、出来高払い制について一章を割いている。そして、まさに、上に挙げたような理由でこの制度に反対であることを明言しているのである。ただし、出来高払い制の導入については、ブラッシー二世が、すでに,『労働と賃金』で提案していることであり、別に、目新しいことではなかった。したがって、この問題に関するブラッシー二世とハウエルの見解の相違は、両者の友好関係に、何らかの悪影響を及ぼすものではなかったのである[7]。

このように、ハウエルは、ブラッシー二世の出来高払い制導入の勧めを受け入れなかった。しかし、ハウエルが明らかにブラッシー二世の見解の影響を受けたと思われる問題もある。それは生協に関するものである。この時期において、生協はかなりの広がりを示していた。ブラッシー二世も生協に強い関心を寄せ、1874年の４月６日には、ハリファックスで開かれた生協連合の年次総会で講演を行っている。その中で、ブラッシー二世は、全体としては、生協に好意的であったが生産協同組合が成功する可能性については否定的だった[8]。本節で、考察した論文においても、生協に簡単に触れている。その際、生産協同組合の成功の可能性を否定するという点についての記述は、1874年の講演よりもくわしく、かつ、明確になっている。「生協の方式を製造業に応用しようとすると失敗する」。その理由は、この種の企業においては、経営者の強力なリーダーシップが不可欠だと考えていたからである。「工場の運営は連隊の命令と同様に独裁的でなければならない。それ故、協同の努力という原理は、製造業には適用不可能なのである」[9]。

つまり、ブラッシー二世は、一人のすぐれた経営による方針の決定の方が、多くの労働者による合議制よりも優れていると考えていたのである。そして、ハウエルも、ブラッシー二世の見解

---

[7] G.Howell1,*The Conflict of Capital and Labour,Historically and Economically Considered*,878.2nd ed.,1890,pp.264-265.
[8] Thomas Brassey,Co-operative Production,*Lectures on the Labour Question* pp.101-167.
[9] Brassey,*op.,cit.*,p.190.

に基本的に賛成であった。1878年の著書において、彼は、生協に一章を割いている。彼は、生協の成果を認めるものの生協が労働争議の解決にはほとんど役に立たなかったことを指摘する。また、生産協同組合については、業績が上がらず、労働者に既存の工場よりも良い待遇を与えられず、そのことが、労資交渉に不利益をもたらす可能性を懸念したのである。「生産協同組合の仕事場や工場では、出来高払い、労働時間、賃金水準その他の問題について、その価値及び生産と価格への影響に関する現実的説明を受けることになろう。もし、生産協同組合の向上が、労働組合によって要求された賃金を支払うことが出来なかったなら、……当然、資本家階級に属する雇用者が要求通りの賃金を払えることなどほとんどあり得ないと論じられるであろう」[10]。

かくして、労働組合運動の指導者たちとブラッシー二世の友好関係は、維持され、1877年10月に、レスターで開催された労働組合会議の年次大会において、ブラッシー二世は、1877年における労働と賃金」というタイトルで、招待講演を行うに至るのである。

（2）ブラッシー二世の1877年度労働組合総連合における講演

1877年の10月17日に、レスターシャーで開催された労働組合会議の大会に招待されたブラッシー二世は、「1877年における労働と賃金」及び「イギリス国内の労働者と外国の労働者」というタイトルで二つの講演を行った[11]。これまでに何度も述べてきたように、1870年代前半のブラッシー二世は、イギリスの労働者の賃金は確かに他の国に比べて高いが、イギリスの労働者の質は高いので、イギリスの労働者の高賃金はイギリスの産業にとって不利な影響を及ぼしてはいないと主張してきた。「世界大不況」がイギリスの産業にも影響を及ぼし始めたこの時期において、ブラッシー二世は、これまでの主張を修正したのであろうか。労働者のストライキについて、彼は、当初は無意味であるという主張していたが、1876年の「インターナショナルレビュー」においては、好況期についてはストライキが成果を生むケースがあることを認めるに至った。ブラッシー二世は、自説に固執する人間ではなかったのである。

しかし、イギリスの労働者の賃金が高すぎるか否かという問題については、彼は、これまでの主張を変えることはなかった。「1877年における労働と賃金」においてブラッシー二世は、自分が経営者の立場の立つ人間であることを明言し、自らの階級に対する攻撃的な運動を促すためにここへ来たのではないという。また、労働者と経営者の間に立って公正な判断を下す以上のことを、自分に期待しないでくれとも述べている。しかし、この講演において、ブラッシー二世は、自分は、これまで、機会あるごとに、労働者を不当な攻撃から守り続けてきたともいう。また、最近、同じような批判が再びなされているのを耳にしたと主張する。つまり、この講演において、彼は具体的なデーターに基づいて、彼のいう不当な攻撃から、イギリスの労働者を守ろうとしているのである。

まず、ブラッシー二世が問題にしたのは、当時のイギリスの産業が本当に衰退しつつあるのかということである。彼は、輸出入の総額を根拠として、これを否定する。彼によれば、1855年から1870年の間に、イギリスの輸出入の総額は２倍になったという。また、貿易の増加傾向は1870年代においても変わることはなかった。1870年の貿易総額は５億４千７百万ポンドであっ

---

[10] 佐喜真望　『イギリス労働運動と議会』（御茶の水書房　2007年）　187頁
[11] Brassey,Work and Wages in 1877、Brassey,*op.,cit*,pp.209-228.

たが、1876年のそれは6億3千百万ポンドに達していた。また、人口一人当たりの工業製品の輸出額を比較してみると、イギリスは6ポンド3シリング2ペンスでフランスの2ポンド18シリング8ペンス、イタリアの1ポンド4シリング8ペンスを大きく上回っていた。これらの数字を根拠として、ブラッシー二世は、イギリスの労働者の賃金は絶対額では高いが、能率の高さ、労働者の監督に割く人員が相対的に少なくて済むことを考慮に入れると、むしろ、割安であると主張するのである。

ブラッシー二世によれば、そうしたイギリスの対外貿易の順調な発展の背景には二つの主な理由があった。第一の理由は、国際的な自由貿易の進展である。その実例として、彼が挙げるのは1860年の英仏通商条約である。この条約の結果、フランスからの輸入は1千7百万ポンドから4千7百万ポンドに激増したが、同時に、イギリスの輸出も185パーセント増加したという。また、第二の理由として、ブラッシー二世が挙げるのは資本家の適切な指導とイギリスの労働者の技術力である。これまで、彼は、イギリスの労働者の技術力の高さは、相対的高賃金を補って余りあると主張していた。この時期になると、イギリスの労働者の賃金は高すぎるという声が強まりつつあった。ブラッシー二世もそうした声があることは知っていたが、持論を決して変えようとはしなかったのである。

さらに、彼は、この講演の中で、イギリスの労働者の賃金は高すぎる、節約心を知らぬ労働者の浪費はインフレを招くという声に対して、具体的な例とデーターを挙げて詳細な反論を試みている。ブラッシー二世によれば、労働者は節約心を知らないという批判は、イギリス以外の国においても広くみられるものであった。まず、最初に、1872年のベルギーの例が挙げられる。すなわち、この年のベルギーにおいては、労働者の賃金は上がったが、貯蓄の残高は減少した。旺盛な需要はインフレを招き、製鉄、亜鉛、ガラス、毛織物業などが危機を経験したという。また、1871年から1872年の間にドイツの労働者の賃金は37％上昇した。しかし、原材料の価格は50％上昇した。また、労働者が上昇した賃金の多くをアルコールに費やしてしまった。結局、労働者の生活コストは賃金以上に上昇した。こうして、ドイツにおいては、既存の政治と社会に対する不満が強まった。このような状況を受けて、社会主義者の活動が強まったという。

次に、イギリスの労働者の賃金は高すぎるのかという問題について、もちろん、ブラッシー二世は持論を変えなかった。しかし彼は、これまでとは異なった観点からそれを論証しようとしたのである。すなわち、ブラッシー二世はこれまではイギリスよりも賃金の低い国々とイギリスを比較し、イギリスの労働者の高い生産性を強調し、それを考慮に入れればイギリスの労働者の賃金は高すぎないと主張していた。しかし、今回の講演では、イギリスよりも賃金の高い国、即ち、アメリカ合衆国の労働者の賃金とイギリスの労働者のそれを比較し、アメリカ合衆国の労働者の方が生産性が高いので、高賃金＝高コストとはなってはいないと主張したのである。その際、比較の対象となった業種は石炭業である。それによれば、アメリカ合衆国の炭鉱労働者は一日10時間働き9シリングの賃金を支払われている。これに対して、イギリスの炭鉱労働者は一日7時間働き、一日5シリング2ペンスの賃金を支払われている。しかし、両者の生産性を考慮に入れるとアメリカ合衆国の労働者の賃金の方が安いというのである。

---

(12) ブラッシー二世は、シュレジェンについてイギリス式の表記を用いている。

ブラッシー二世は、シェムニツッツ（Chemnitz)、シレジア（Silesia）[12] などドイツの都市において競争の激化が労働者の生活水準の低下と向上心の喪失をもたらしていると憂慮し、利益を労働者に還元することによって労働意欲を向上させる必要性を説き、それを実践した経営者の実例として、彼の父であるブラッシー一世とドイツのクルップ（Krupp）を挙げている。また、彼らは労働者と直接かかわりを持ち、労働者と利益を分かち合ったという。ここで、ブラッシー二世が、労働者と経営者が直接的な人間関係をもつことを重視していることが注目される。この考えを推し進めれば、労働者にとって顔の見えない経営者＝投資家は好ましくない存在となる。事実、この講演の随所で、彼は、投資家を批判しているのである。彼は、現在の不況の原因は、過剰な投資によって供給過剰が生じたことにあると考えていた。ブラッシー二世は、その実例として、鉄道の拡大に対応するために生産設備を急拡大させ、その結果、深刻な供給能力過剰に陥ったとされる1870年代前半のアメリカ合衆国とイギリスの鉄工業、鉄道業、炭鉱業を挙げている。

ブラッシー二世は、これまでは訓練と経験を積んだ製造業者が得ていた利益の全てを独占しているとして、投資家＝株主を批判している。彼らは、経営権を握ると設備を拡張し、新設した工場の仕事を見つけるために安値の受注に走るという。また、彼らは、技術も実務の知識もない人間に経営を任せてしまう。このため、鉄道料金の値下げのために、労働者の賃金を切り下げ、反発した労働者の暴力的なストライキを招いたとして、アメリカの鉄道会社の経営者を批判している。このころ、イギリスの北西部鉄道会社もかつてない利潤率の低下に苦しんでいたという。ブラッシー二世によれば、その責任を負うべきは労働者ではなく、過大な競争（overcompetition）の元凶であり、賃金その他のコストは平気で削減しても、自分の投資額に見合った配当だけはしっかりと確保する資本家＝投資家出身の経営者だというのである。

この講演の終わりの部分で、ブラッシー二世は労働組合に対する批判に反論し、労働組合を擁護しようとしている。労働組合を敵視する人々は、労働組合は同じ賃金でより少ない時間しか働かないこと及びより少ない仕事しかしないことを目指す有害な団体だと非難した。これに対して、彼は、持論であるイギリスの労働者の質は他の国に比べて高いという主張で反論する。「他の国で得られる商品よりもはるかに優れた品質の多くの重要な商品を生産しているという点で、我が国の評判は相変わらず高い。繊維工業において、我が国の毛織物の質は価格を考慮に入れても比類のないものである。造船、機械、金物等においても、我が国の優位が認められる」[13]。これの事実は、イギリスの労働組合に加入している労働者の質の高さを示すものであり、労働組合に加入することにより、労働者の質が低下するという批判が全くの誤りであることを示すものであった。

ブラッシー二世は、労働組合は製造業が新しい局面に入った結果、必然的に生じたものとして認められなければならないという。さらに、彼は、労働組合に関する実際的課題は、もはや、その承認の是非ではなく、その存在を前提として、労働組合という重要で広範な成員を擁する団体をいかに有効に活用するかだという。ブラッシー二世は、その具体例についても述べている。彼によれば、労働者は、経営者が挙げている利潤について不安を持っているという。それがわからないと賃金及び労働時間の短縮がどこまで可能かがわからないからである。ブラッシー二世は、

---

[13] Brassey.,*op,,cit.*,p.226.

こうした問題を解消するために、労働組合を内外の経営に関する情報を得る組織として活用することを提唱している。つまり、彼は、経営者が労働組合に経営に関する種々の情報を提供すれば、労使の相互信頼が向上し、交渉がこれまでよりもスムースに進むと信じていたのである。

また、ブラッシー二世は、労働組合は、労使交渉以外でも社会的に有益な役割を果たしうるという。すなわち、労働組合のメンバーによる相互扶助により、社会改革が可能になると考えたのである。具体的には、住宅協会、生協、合理的娯楽の提供、技術教育などを挙げている。また、彼は、労働組合が交渉による労資協調に積極的な役割を果たすという年来の主張に加えて、この大会において、労働組合は民衆の福祉に関する諸立法を注意深く観察するという自らの責任を自覚していることを示したという。具体的には、雇用者と労働者の法の海運労働者への適用、労働者の災害に対する雇用者の法的責任の明確化、工場法の全業種への拡大などの、当時、議会で審議中、または、近い将来に法案が提出される諸問題について、労働組合の側の支援に期待しているのである。

これまでの考察から明らかなように、この講演において、ブラッシー二世はイギリスの産業の将来及び労使関係について楽観的であった。しかし、全く何の不安も感じなかったわけではない。講演の最後に、彼は、招待と彼に対する労働者の信頼に再び謝意を表するとともに、企業の規模が拡大するにつれて経営者と労働者の親密度が減ることに対する不安を語っている。彼自身は、父親の鉄道建設の仕事を継がなかった。しかし、彼によれば、自分は経営者と労働者の親密な関係を維持したかったが、父親の意志により、それをあきらめねばならなかったのだという。ブラッシー二世によれば、両者が親密な関係にあってこそ、多くの偏見が取り除かれ、真実に到達し、公正が維持されるという。彼にとって、労使協調の原理に立つ労働組合はまことに重要なものであった。

第一の講演の後、ブラッシー二世は「イギリス国内の労働者と外国の労働者」[14] というタイトルで、もう一つの講演を行った。この講演で、彼はイギリスの労働者の質は他国の労働者よりも高いので、相対的に高い賃金を支払ってもイギリスの経営者には不利にならないという年来の持論を展開している。ただし、労働者が高い能力を維持するためには、それにふさわしい生活レベルが必要であるという論点が、従来にも増して強調されている。不況期という当時の状況を踏まえた時、ブラッシー二世のこうした主張は、極めて親労働者的なものであった。なぜなら、彼の主張は、労働力の質が高ければ、高賃金でも別にかまわない、逆に、賃金を下げても、労働力の質が低下したならば、経営者にはプラスにならないという主張へと発展してゆくからである。

ブラッシー二世はそうした自らの主張の正しさを示す実例として、他のヨーロッパ諸国の労働者の状況を引き合いに出す。まず、父のブラッシー一世が、パリとルーアンを結ぶ鉄道を建設するために、5千人のイギリス人の労働者を連れてフランスに赴いた時のエピソードが紹介されている。鉄道建設は初めてであったが、フランス人の労働者たちは、他の土木工事での経験を生かして、それなりの働きをした。しかし、イギリス人の労働者たちが仕事を始めると、自分たちにはまねのできないその能率の高さに、驚いて両手を挙げたという。ブラッシー二世には、イギリスの労働者は、生活水準に関して多くの点で大陸ヨーロッパの労働者に対する優位を保ち続けて

---

[14] Brassey.,Labour at home and abroad, *Ibid.*, pp.229-242.

いるという。彼によれば、フランス人の大部分の生活条件は、過去25年を通じてほとんど変わらなかった。ルーアンの労働者の住宅は悲惨なものであり、フランスの女性の織布労働者は衣食住とも惨めな状態にあっただけでなく一日12時間も働いていたのである。

ブラッシー二世は、次に、ベルギーの例にふれる。彼によれば、ベルギーの労働者の賃金は、低く、成年男子の平均賃金は週8シリング、女性と子供の収入を加えても週14シリングであった。そのため、ベルギーの人々は生活を維持することに苦労し、肉、ビール、砂糖は、彼らの日常的な食事には出されなかったという。こうしたデーターを根拠として、彼は、注目すべき主張を行っている。この時期において、「世界大不況」の影響は、イギリスだけにとどまらず、全ヨーロッパに、そして、もちろん、ベルギーにも及んでいた。つまり、賃金がイギリスよりもはるかに低い国も、イギリスと同様に「大不況」の影響は受けたのである。したがって、ブラッシー二世は、賃金をぎりぎりまで切り下げることは、経済の縮小を防ぐ最良の手段とは言えないと主張する。彼によれば、労働者に正当な賃金を支払うことの方が、より安上がりで、より幸福な方法であった。また、悲惨と貧困を代償として得られた産業の繁栄は望ましくないとも語っている。

ブラッシ二世は、賃金が上がっても、生産性がそれ以上に向上すれば製品価格はあがらない＝国際競争力は低下しないと考えていた。彼は、その具体例として大英帝国内の鉄道建設コストに注目している。1858年から1870年までの間に、これらの地域における全労働者の賃金は大幅に引き上げられた。しかし、１マイル当たりの鉄道建設コストを比較してみると1858年が34099ポンド、1870年が34100ポンドでほとんど変わりはなかった。1875年の１マイル当たりコストは、38000ポンドに上昇しているが、それは、特にコストのかかる大都市における鉄道建設の費用が含まれているためであり、それを除外すると、１マイルあたり34000ポンドをかなり下回る価格で、鉄道の建設が可能になったという。ブラッシー二世の見解では、1870年代後半においても、機械の導入と経営の改善によって賃金の増加によるコストの増大を製品価格を引き上げずに吸収することは十分に可能なことだったのである。

ブラッシー二世は、現在のイギリス経済が不況期にあることは認めた。しかし、不況の原因を、イギリスの労働者の相対的高賃金のみに求めるのは誤りであると明言する。彼が1877年の労働組合会議で行った第一の講演で、不況の重要な原因は投機家にあると主張したことについてはすでに述べた。今回の講演では、具体的な数字を挙げて自説を補強しようとしている。「大不況期」直前の1872年から1873年の時期は、石炭及び銑鉄の価格が高止まりした時期であった。このような情勢をみて、投機家は生産の拡大を行った。しかし、高価格の時期は長続きせず、需要の減退と過剰生産により、石炭と銑鉄の価格は急落したのである。彼のデーターによれば、石炭の価格は、1872－1873年の７シリング６ペンスから1876年には２シリング６ペンス、銑鉄の価格は、６～７ポンドから２ポンド５シリング３シリングへと大幅に下落したのである。この結果、いくつかの高炉は休止余儀なくされ、賃金も低下したという。

このようなデフレ状態から脱却することなしに不況からの脱出はありえない。しかし、そのためには価格の上昇を消費者がある程度まで受け入れてくれなければならない。そこで、ブラッシー二世は、イギリスの炭鉱業や製鉄業が今後も発展し続けるためには、消費者も適切な価格の上昇を受け入れる必要があるという。これは、これまでの生産性の向上により製品価格を引き上げなくても賃金を引き上げることは可能であるという主張とは矛盾する。恐らく、彼は、1876年の

石炭及び鉄の価格はあまりにも低すぎるとみなしていたのであろう。ブラッシー二世によれば、石炭業や製鉄業の資本家の利潤のかなりの部分は、新しい炭鉱の発見と労働の拡大に割かれるという。また、炭鉱業における労働者の保護の拡大は、疑いなく有益なものであるが必然的に生産コストの増加を招く、そのコストについては消費者に負担してもらわねばならないと主張する。同時に、ブラッシー二世は、労働組合に対して、供給の削減と労働時間の短縮によってデフレを阻止できると考えないように警告している。そうすることは、品質の裏付けなしの製品価格の上昇を招き、保護貿易制度が導入されていない市場＝中立市場においても、イギリス製品が他国との競争に敗れるという事態をもたらすというのである。

彼は、基本的に、イギリス製品の高い品質に自信を持っていたが、そうとは言えない場合もあることを見逃さなかった。ブラッシー二世によれば、価格の低下を補うために、糊（size）を用いて見ばえを良くした粗悪な綿製品が中国に売り込まれ、そのため、イギリス商品の中国における評判は破滅に近いものとなったという。また、最近行われた報告の中で、広東駐在の領事ブルック＝ロバートソン卿（Sir.Brook Robertson）も、そうした行為をやめさせて、東洋におけるイギリス商品の質を回復する必要性を、きわめて、強い言葉で指摘していると語っている。

それでは、ブラッシー二世はデフレをどのようにして克服しようとしたのであろうか。まず、第一に市場の拡大である。彼によれば、今回の不況の打撃は、イギリスよりもアメリカ合衆国の方がはるかに深刻であった。その大きな理由は、アメリカ合衆国が保護貿易政策を取っているため、アメリカの製品には輸出市場が小さいことにあった。こうして、ブラッシー二世は、アメリカ合衆国が保護貿易政策を撤回し、その結果、世界の貿易が活発化し、イギリス製品に対する需要も拡大することを期待したのである。第二に、労働者の生活の向上である。彼は、労働者に相対的高賃金を支払っても、労働力の質を高めれば、経営者にとってコスト増にはならないという持論を、「大不況」期になっても決して変えることはなかった。ブラッシー二世は、賃金の引き上げ＝労働者の生活条件の改善は消費の拡大＝デフレの克服につながると考えていたからである。「全ての政治経済学者は、高い生活水準は勤勉を、低い生活水準は怠惰を促すという点で意見が一致している」[15]。

また、良好な関係下における労働組合との労使交渉は、経営者にとっても有益であると主張している「労働者が賃金の引き上げを確保するためには、より多くのまたはより良い仕事をしなければならないということを知っている所では、より良い生活を求める願望は労働者と経営者双方に有益である」[16]。彼によれば、たとえ離れていても、社会の諸階級は、相互に依存していた。それ故、異なった諸階級が一体となって協力することこそ、イギリスの国家と国民がともに繁栄する鍵であった。トマス＝ブラッシー二世は、この講演の最後の部分で、自分は、そうした協力を推進するためにレスターへやってきたと述べている。また、彼は、この講演の成功を確信し、感謝の念に満たされてこの町を去ると結んでいる。

(3) ブラッシー二世の1878年講演

1877年の労働組合会議に招かれて、講演を行った後、ブラッシーの楽観的な見通しにもかか

---

[15] *Ibid.*, p.237.
[16] *Ibid.*, p.238.

わらず、不況はさらに進行していった。そのような情勢下において、ブラッシー二世は、イギリスの労働者と労働組合に関するこれまでの見解を果たして修正したのであろうか。また、彼とリブ＝ラブ派の労働組合運動の指導者たちとの関係は変化したのであろうか。この問題を探る手がかりとなるのが、1878年にブラッシー二世が行った講演とシンポジウムである。

1878年１月21日、ブラッシー二世は、ロンドンのホークストンホール(Hawkstone Hall)で、「イギリスの労働者と外国の労働者の効率性の比較について」(On the Comparative Efficiency of English and Foreign Labour)というタイトルで講演を行った[17]。この講演の冒頭で、彼は、現在のイギリスの産業がほとんど全ての部門で不況であり、長い不況に意気消沈した公衆が外国との競争に敗れるのではないかという漠然とした不安を抱いていること、イギリスの労働者が相対的により怠惰になり技術も低下したため、生産コストが増し、イギリスの製品は輸入品にとって代わられつつあるという主張がなされていることなどを認めた。また、ブラッシー二世は、労働コストは高くなったが効率は低下したという現象がみられるとし、一層の節約と労働の質を向上させることによってイギリスの国際競争力の低下の問題に取り組むことが、労働者階級と彼らの助言者たちの義務であると述べている。

しかし、ブラッシー二世は、これに続いて、現在のイギリスで流行しているこうした批判と同一の批判が、他のすべての工業国で見られることを指摘することは正当であると述べている。この事実は、今回の彼の講演の主なねらいが、イギリスの労働者の質の低下を批判することではなく、ますます強まりつつあった労働者階級に対する批判に反論し、具体的なデーターに基づいて労働者を擁護することにあったことを推測させるものである。まず、彼は、イギリスの不況は深刻なものであるが、他の国においても、同様な事態が起こっているとして、フランス、ベルギー・ドイツの例を引いている。

つまり、この講演の時点においても、ブラッシー二世は、特に、イギリスの経済が深刻な不況にあるわけではないとする、これまでの見解を変えなかったのである。同時に、彼は、最新のデーターに基づき、イギリスの労働者の賃金が高すぎるために、イギリスの産業は衰退しつつあるという見解を批判している。今回の講演で彼が特に詳しく論じているのは、繊維工業についてである。それによれば、1875年と1876年の繊維製品の輸出量を比較してみると、イギリスの輸出量は停滞してはいるが減少はしなかった。これに対して、フランスの輸出量は約7.8％減少したという。また、労働者一人当たりの紡錘数（イギリスが78であるのに対してフランスは60）成年労働者の比率（イギリスが40％であるのにフランスは50％）の双方において、イギリスの綿工業は、フランスに対して優位にあると主張する。また、イギリスの商品が、国際競争に敗退しつつあるという説については、スウェーデン、ノルウェー、プロイセン、ザクセン、バーデン、ヴュルテンブルグ、アルサス、オーストリア、スイス、ベルギー、フランス、イタリアといった諸国及び諸地域でフランスはイギリス製品との競争に敗北しつつあるという声があがっていると反論する。

ただし、明らかに生産が減少し、その結果、労使関係が悪化した業種も存在した。ブラッシー二世は、こうした業種についても言及しなければならなかったのである。彼は、1877年のクラ

---

[17] T.Brassey, On the Comparative Efficiency of English and Foreign Labour, *Ibid.*,pp.243-263.

イド地方の造船業のストライキについて、昨年の労働運動における最も嘆かわしい事件と呼び、この問題についてかなりくわしく論じている。この地域における船の完工高は、1874年の26万8千トンをピークとして年々減少し、1877年には16万8千トン、すなわち、約6割にまで減少したのである。ブラッシー二世によれば、造船業がかつてない不況にあったにもかかわらず、1877年4月に造船及びこれに関連する約1万5百人の労働者は賃金の引き上げを要求し、それが拒否されるとストライキに突入した。これに対して経営者の側はロックアウトで対抗した。結局、この争議は3か月後調停によって解決したが、労使双方とも多額の損失を蒙った。彼は、この争議においては、明らかに労働者の方が誤っていたという。

経営者の代弁者を自認するブラッシー二世の立場からすれば、不況期におけるストライキの意義を認めないのは当然である。しかし、この講演における彼のストライキに対する態度は、いくつかの点で、これまでの彼の著述や発言とは異なっていた。まず、第一に、彼は、労働者のストライキの正当性は認めなかったが、同時に、経営者の側の判断ミスについてもかなり詳しく言及している。すなわち、造船業者たちは、採算をあまり考慮することなく、安値での受注に走っていたというのである。いくつかのケースにおいては、賃金がそのままであっても、業者は赤字であったという。

これが事実であるとすれば、当時、しばしば主張された、労働組合とそのストライキがイギリスの造船業の衰退をもたらしたという主張は、説得力を失うことになる。事実、ブラッシー二世は以下のように断言しているのである。「造船工の誤った行動が造船不況の唯一の原因であると言うのは正しくない」[18]。彼は、一方的に、労働者を責めるのではなく、あくまでも、労使協調によって造船業の危機を克服しようとした。ブラッシー二世は、賃金を好況期と不況期とに分けて考え、労働者に、不況期における賃金の引き下げに無駄な抵抗をしないように説いている。この時期の、彼は、現在が不況期であることは認めていたが、イギリス経済の将来については楽観的で、好況期が再び到来するものと信じていた。彼は、賃金の引き下げが一時的なものであることを強調し、そのことによって、イギリスの競争力が維持され、新しい市場の開拓によって、新たな需要が創出されれば、賃金はまた上がると説いたのである。

ブラッシー二世は、同時に、賃金は下がっても、生活費が下がれば、労働者は、実質的な影響を受けないとも説いている。彼は、その実例としてアメリカ合衆国の労働者を挙げている。アメリカ合衆国においても、1873年以降、デフレが生じた。その結果、シンシナティにおいて、一般労働者の賃金は5年間で、一日当たり1ドル50セントから1ドルにつまり33パーセント余り引き下げられた。その間、石炭の50パーセント、家具の35パーセントをはじめ、日用品の価格も大幅に低下した。ブラッシー二世の計算によれば、5年間でアメリカの労働者の生活コストは、30パーセント以上低下したという。つまり、賃金の引き下げ額と生活費の値下がり額の比率は、ほぼ同じであり、常勤の職についていれば、賃金引き下げの労働者に対する悪影響はほとんどなかったと主張するのである。彼は、この例を挙げて、多少の賃金の引き下げを受け入れても雇用の安定の方を選ぶよう、イギリスの労働者を説得しようと試みているのである。

これまでの考察から明らかなように、この講演において、ブラッシー二世は、当時のイギリス

---

[18] *Ibid.*,p.252.

が不況下にあることは認めたが、それほど事態を深刻に考えず、しばらくすると、再び好況の時代が到来すると信じていた。彼は、労働者に対して、賃金の引き下げに耐えるように説いたが、それは、引き下げは一時的なものであると考えていたからである。しかし、同時に、ブラッシー二世は、今回は、これまでにはなかった新しい事態、すなわち、アメリカ合衆国をはじめとする他の諸国の急速な工業の発展が出現したことを見逃してはいなかった。この講演の最後の部分は、この問題に対する彼の見解に割かれている。ブラッシー二世は、イギリスが、もはや、世界の工場として、世界の工業製品市場を独占することが不可能になったことを認める。しかし、彼によれば、それは望ましいことであった。イギリスが今後も世界の工場としての地位を保ち続けることは、イギリス国内における過度の工業化＝自然の破壊をもたらすと考えたからである。

「人類の技術と活力を示す実例として、いかにすばらしいものであっても、必然的に、自然の中の美しく愛らしい物の多くを破壊するこうした工業の発展を他の国と分かちあうことほど素晴らしいことはないのではないか？皆さんは、ランカシャーとヨークシャーの全ての地域が炭鉱によって蜂の巣のようになり、全ての丘の頂には巨大な工場が建つような光景を目の当たりにしたいと望んでいるのか？?木も花もつぼみもない、丘からのそよかぜもない、人々をリフレッシュさせる海もない生活は不完全な生活であり、人々にそれを享受するように与えられた、もっとも純粋な、最良の喜びを欠いている」[19]。

最後に、ブラッシー二世は、今後のイギリス経済の発展のためには。アメリカ合衆国との友好関係を更に発展させることが重要であると考えていた。彼が、アメリカ合衆国が保護貿易政策を撤回し、イギリスの工業製品に門戸を開いてくれれば、両国の経済発展にとって有益であると主張したことについてはすでに触れた。ブラッシー二世は同時に、イギリス国内における失業者に新たな就業の機会を提供する場としてのアメリカ合衆国にも注目していた。彼は、現世代及び来るべき世代の若者が他の国に移住し、その地で生計を立てる必要性が増すと述べている。移住者が、母国に対する良い記憶を保持している限り、そうすることは好ましいことであった。ブラッシー二世は、特に、アメリカ合衆国とイギリス本国との間で、そうした関係が成立することに期待をかけている。「ユニオンジャックのもとであろうと、星条旗の下であろうと、アングロサクソン民族が発展してゆく姿が、私の眼前に浮かんでくる。同一の言語を話し、同一の文学で教育を受け、我々と密接に結びあった、新たな国民が興隆する姿が目に浮かぶ」[20]。

1878年2月4日、ブラッシー二世は、王立建築家協会（Royal Institute of British Architects）のために「ロンドンの建築業における賃金上昇について(On the Rise of Wages in the Building Trades of London)」というタイトルでシンポジウムの基調報告を行った。その冒頭において、彼は、この報告を実現するにあたって、協力してくれた人物名を４人挙げ、謝意を表している。彼らは、３種類に分かれる。まず、この問題に関する公平な情報を収集して欲しいという彼の要請に協力してくれた人物としてハント(Hunt)とステフェンソン(Stephenson)の二人の名が挙げられる。次に、シンポジウムにおいて、建築業者の代表として参加してくれた彼の旧友のルカス兄弟(Messrs. Lucas Brothers)に感謝のことばが述べられる。ブラッシー二世は、講演を行うに際して、常に、自らが公平な立場に立っていることを強調していた。このような彼の

---

[19] *Ibid.*,p.262.
[20] *Ibid.*,p.263.

主張が説得力を持つためには、労働者の代表の参加が必要であろう。そして、労働者の代表としてこれに参加し、ブラッシー二世が感謝の意を表明した人物こそジョージ＝ハウエルだったのである。

ブラッシー二世が、1877年10月17日に行われた、イギリス労働組合総連合のレスター大会で講演を行ったこと及びその内容についてはすでに述べたとおりである。今回のシンポジウムにおいては、ジョージ＝ハウエルが、ブラッシー二世の報告に対する最初のコメンテーター役を務めている。また、ブラッシー二世は、基調報告の中で、労働者の側の見解を代表するものとして、ハウエルの見解に何度か言及している。さらに、冒頭では特に触れられてはいないが、ジョージ＝ポッターも、ハウエルと同じようにこのシンポジウムにコメンテーターとして参加している。このシンポジウムは、ブラッシー二世と当時の労働組合運動の指導者たちがお互いに深い信頼関係で結ばれていたかを物語るものであると言うことができよう。

ブラッシー二世の報告は、まず、建築労働者における賃金と労働時間の歴史的変遷から始まる。その際、分析の起点となっているのは1837年から1847年までである。この時点において、ロンドンの建築労働者の、一週当たりの労働時間は60時間、賃金は30シリングが標準であったという。この基準は、1847年までに、ほぼ、一般的なものになったが、職種間でばらつきがあり、定着するまでには数年を要した。石工と煉瓦積工が最も早く、大工、左官、塗装工がこれに続いたという。1847年以降、建築労働者たちの労働条件は、着実に改善されていったという。1847年に、土曜日の労働時間を１時間半短縮する運動が起こり、労働者の要求は比較的短期間で実現した。1853年以降、一日の労働時間を9時間とすることを要求する運動が起こった。この要求は拒否されたが、代償として、約10%の賃金の引き上げが、主要な作業場の大多数の労働者に認められるようになった。

1859年に、労働者が一日９時間労働を要求してストライキを行うと経営者の側は「ゼネラルロックアウト」で対抗した。周知のように、このストライキは、その後のイギリスの労働運動の指導部となる「ロンドン労働組合評議会」結成のきっかけとなる重要なストライキであり、労働者は一日9時間労働の要求を取り下げる、他方、経営者の側は、労働組合不加入誓約書を再雇用の条件とすることを取り下げるという形で決着した。ブラッシー二世自身は、この有名なストライキについて、特別なコメントは加えていないが、その後、賃金の引き上げ及び労働時間の短縮が進んだことに言及している。すなわち、1865年、1866年、1872年、1873年に賃金の引き上げが行われ、さらに、1872年には週4時間、1873年にはさらに週2時間の労働時間の短縮が実現したのである。つまり、一日、９時間労働という労働組合の要求は、その後、実現したのである。

不況期においては、賃金は抑制または一時的な引き下げがなされるべきだと考えていたブラッシー二世は、このような事実を前にして、いかにして、自説を正当化し、賃金の引き上げを求める建築労働者を説得しようとしたのであろうか。まず第一に、彼は、具体的なデーターに基づいて、労働組合が賃金の引き上げに及ぼし得る影響力を否定しようとした。彼が使用し1865年と1875年と建築に関係する12の職種の賃金の上昇率を比べてみると、どの職種の賃金も、時間当たり1.5ペンスでほぼ同一であった。したがって、元々の賃金が低い未熟練労働者ほど賃金の上昇率は大きくなる。この時期において、未熟練の建築労働者の組合は存在せず、建築労働者の組合のメンバーは熟練労働者に限られていた。ブラッシー二世によれば、このことは労働組合が長

期的な賃金の引き上げに対してほとんど影響力を持っていないことを物語るものであった。もし、労働組合が賃金の引き上げに影響力を持っているとしたら、強力な組合を結成している職種の賃金の上昇率が組合のない労働者のそれを下回ることなどあり得ないというのである。

ブラッシー二世は、賃金の引き上げに反対するもう一つの根拠は、これ以上の賃金の引き上げは、生産コストの増加を招き、経営を悪化させ、労働力に対する需要の低下を引き起こし、かえって労働者に不利になるというのである。彼が、ステフェンソンから得たデーターによれば、1865年に5000ポンドの費用で建てられた建物が、1875年に再建されたとき、そのコストは5624ポンドに上昇していたという。ただし、このデーターに従えば、コストの上昇率は12%強であり、約20パーセントという数字が最も多かった熟練労働者の賃金引き上げ率を下回っている。この理由について、ハウエルは機械化、道具、技術の向上を指摘したが、ブラッシー二世は出来高払い制の導入によるものであると主張した。これまでに何度も述べてきたように、労働組合の指導者たちは、組合員同士の分断につながる出来高払い制の導入に反対し続けた。ブラッシー二世の基調報告に対する、最初のコメンテーターとなったハウエルも、出来高払い制に反対であることを明言している。

不況に直面して、ブラッシー二世は、より反労働組合的になったのであろうか。そうではなかった。この報告の最後の個所で、彼は、自らの階級の利益のみを考え、公的な利益に対して無関心であるという批判に対して、労働組合とその指導者を擁護することに力を注いでいる。彼は、自分が労働組合運動の指導者たちと直接的関わりを持ち、その結果、彼らの行動と目的を熟知していること及び彼らが議会を重視し、暴力とは無縁であることを強調する。「私は、昨年、レスターで行われた労働組合の会議に出席した。私は。私と同じ立場の人間では、この会議に参加した唯一の人物である。この会議の進行は、賞賛に値するものであったと証言できる。討議の主題は理性的かつ適切であった。議会で審議されるように提案された問題は、それに、ふさわしいものであった」[21]。

イギリス労働組合会議1877年大会の穏健で理性的な状況は、第一インターナショナル（実際には1876年に解散していた）の方針と対比される。そこでは、資本家の貪欲から有用な階級を守るために平等の原理に基礎を置く生産手段の国有化を行うという主張に代表されるような、無意味な宣言が拍手喝采を受けるというイギリスにおいては決して存在しない光景が見られたという。ブラッシー二世によれば、イギリスの労働運動の指導者は、他のいかなる国の人々よりも、空想的な理念に惑わされたり、漠然とした嫉妬に満ちた非難に耳を傾けたりすることが少ないという。また、イギリスの労働組合運動の指導者たちは義務感、順法精神などにおいて、他の国の人々よりも優れているという。

ブラッシー二世は、報告の最後の個所で、労働問題の自然な解決法は労働力の供給の増大にあると述べている。その際、彼が、労働力として念頭に置いているのは、熟練労働力であることが注目される。ブラッシー二世は、労働力の供給の問題に関して、外国人労働力の移入よりも、イギリス本国の若年労働者を大量に訓練して熟練職人として育て上げた方が、より簡単で、満足のいく成果が得られると述べている。彼にとって、肉体労働をいやがる傾向は、深刻な、しかも、

---

[21] *Ibid.*,p.290

強まりつつあること悪習であった。また、そうした傾向の起源は、熟練した肉体労働よりも事務労働の方を高く評価する誤った社会制度にあった。これに関連して、ブラッシー二世は、自分は民衆教育の拡大を支持するが、そのことにより、前述の傾向が、助長されないように気を配ることを勧めている。さらに、特権諸階級が、誠実な労働（honest labour）を高く評価し、熟練労働と教養及び洗練されたふるまいとは両立可能であると確信していることを示すように勧めている。

ブラッシー二世が基調報告を終えた翌日、コメンテーターが論評を行い、それを踏まえてさらに論議がなされた。すでに述べたように、最初のコメンテーターとして、議長に指名されたのはジョージ＝ハウエルであった。ハウエルは、このシンポジウムを建築業者及び請負業者と建築労働者が対等な立場で労働問題について論議できる場として高く評価する一方で、煉瓦積工としての自らの経験をもとに、建築業での出来高払い制は不可能であると主張した。ただし、ハウエルの基本姿勢は、あくまでも労使協調にあった。この年に出版された、彼の著書『歴史的経済学的に考察した資本と労働の抗争』の中で、ハウエルは、労働者全体の労働条件の改善をめざす労働組合は、人道的な経営者がそのことによって不利を蒙らないように努める、良い経営者にとって有益な存在であると強調している[22]。

また、四番目のコメンテーターとしてジョージ＝ポッターが登場し、トマス＝ブラッシー二世の報告には何の偏見もないとして、それを高く評価する一方で、経営者の立場と労働者の立場の相違を強調する。彼によれば、過去30年間で建築労働者の賃金は44パーセント上昇した。他方で、資本の方は250パーセント増加しているという。それ故、ポッターによれば、労働者が更なる賃金の引き上げを要求することに何の問題もなかったのである。また、彼は、質の高い労働者に高い賃金を支払った方が、質の低い労働者をより低い賃金で雇うよりも経営者にとって利益があがると述べた。また、自分がハウエルと同様に出来高払い制に反対であることを明言している。

その後、主に経営者の側から、さらに８人がコメンテーターとして発言を行った。その際、彼らは、ハウエルやポッターの発言にも言及している。このシンポジウムにおいて、何らかの結論が出されるということはなかったが、このシンポジウムは、当時の有力な経営者の代表と労働運動の代表とが対等の立場で一堂に会し、お互いの主張を発表し議論しあう場が持たれたという点で画期的なものであったということができよう。

1878年のブラッシーの二つの講演と労働運動の指導者の態度を検討する限り、世界的な不況の影響は感じられていたが、まだ、それほど深刻なものとは受け止められず、労働者と経営者の対立よりも、お互いの信頼関係を基礎に、労働問題を話し合いで解決しようとする姿が目立つ。

むすびにかえて

本稿で考察した時期における、ブラッシー二世の主張は、彼のこれまでの主張との連続性と更なる発展を示すものである。彼は、本稿で取り上げた時期が不況期であることは認識していたが、それほど深刻なものとは考えていなかった。また、労働組合運動の指導者及び労働組合との友好

---

[22] 佐喜真望　前掲書197頁

関係をさらに深めることをめざした。1876年に『インターナショナルレビュー』に執筆した論文において、農業労働者の待遇の改善と組合の結成に好意的な態度をとった。さらに、農業労働者の場合には労働組合が、労働者の賃金水準に大きな影響力を持つことを認めたのである。

このような彼の態度は、労働組合運動の指導者に好意的に受け止められ、ブラッシー二世は、1877年10月にレスターシャーで開催された労働組合総連合第７回大会で招待講演を行うことになるのである。その中で、彼は、一定の留保つきではあるが、イギリスの労働者の質的優位と労働組合の社会的有用性を説き、過度の賃金の引き下げがデフレ＝不況の悪化をもたらす危険性を警告するとともに、良好な関係下での経営者と労働組合との労使交渉はお互いに有益であると主張したのである。また、1878年１月に、ロンドンで行った講演では、不況の結果、賃金が引き下げられる可能性について言及しているが、同時に、労働組合が産業の衰退をもたらすという主張についてはこれをきっぱりと否定している。

このような、ブラッシー二世の主張は、労使双方から好意的に受け止められ、1878年２月に、経営者、労働組合運動の指導者の双方が参加して開催された、ロンドンの建築労働者の賃金に関するシンポジウムとして結実することになる。また、このシンポジウムにおいて、ブラッシー二世は、基調報告者の役割を務めることになる。その際、彼は、ハウエルを有益なデーターの提供者として経営者であるデーターの提供者と同等に扱っている。その後、討論が行われ、経営者と労働組合運動の指導者の間で見解の相違は見られたものの、コメンターターとなった労働組合運動の指導者たちは、このシンポジウムを労使が対等の立場で議論する機会を提供したとして高く評価したのである。こうして、ブラッシーの尽力により、労使が交渉によって意見の相違を解決しようとする試みはさらに進展したということができよう。

ただし、その後のイギリス経済は、ブラッシー二世が予想したように、すぐに回復することはなかった。むしろ、さらに進行していった。また、彼が、不況から脱する重要な契機になると期待したアメリカ合衆国の自由貿易主義への政策変更も実現しなかった。このような事情を踏まえて、彼は、イギリス経済の現状に関する詳細な調査を行いつつあった。この成果は、1879年『不況との関連で考察した外国の労働者とイングランドの賃金（Foreign Work and English Wages,Considered with Reference to the Depression of Trade)』というタイトルの400ページを超える大著として出版されることになる。その中で、彼は、当時のイギリス経済の状況及び労使関係をどのように理解していたのか、また、そのことを踏まえて、経営者の代弁者としての立場を堅持しつつ、労働組合運動の指導者たちとの友好的な関係を損なわないために、何を、労働者たちに訴えようとしたのか、こうした問題を解明することが次の研究課題となる。